

# フィンドレー大学アニマルハンドリングプログラム

2017 年春

学籍番号 21361027 氏名井出 雅春

私はこのプログラムを去年の今頃は、まだ知りませんでした。去年のフィンドレー大学へのこのプログラムに参加した北名くんからのみやげ話を聞いて初めて知りました。そして去年の5月にフィンドレー大学からの留学生の受け入れに際してフィンドレー大学の学生達と触れ合い、様々な所へ行き、話をし、フィンドレー大学への魅力、英語圏への好奇心を駆り立てられました。そして様々な障壁がある中でこのプログラムへの参加を決意しました。このプログラムで経験したことは全て感動的で刺激的なものばかりでした。今思い出だけでも興奮を禁じ得ない程です。この今書いている報告書は多分「来年行こうかな」と考えている人が見る事でしょう。これだけは言いたいです。

「参加してください。何があっても参加してほしい。必ずあなたの人間性に刺激をくれる。そして必ずあなたを次のステップへ大きく飛躍させてくれます。」こんな言葉では足りない位ですが、行くか悩んでいる人が1人でも決心してこのプログラムにトライしてくれる事を心の底から願っています。前置きはこのあたりにしておき、私が何を学んで、何を得てきたかを書いていこうと思います。

私たちは毎朝6時前には起床し、バスに乗りウェスタンバーンという学外農場に行っていました。気候、天候の変わりやすいフィンドレーで雨、雪、濃霧、晴れどんな日でも毎日欠かさずいきました。バーンでは馬に草、グレインを給餌し、掃除し、薬をあげ、ブラッシングを代わる代わる行い、毎日新鮮な気持ちで業務に取り組みました。これらの仕事は常に馬学部の学生達と共に行い様々な学生達とバディーを組みました。その中で教えを受け、話をし、友達になり、充実した毎朝を過ごしました。フィンドレーの馬学部の学生との馬の世話が終わった後には獣医師の馬の治療を見たり、実際に馬に乗せてもらったり様々な体験をさせていただきました。



朝7時から10時までのウェスタンバーンでの馬学部の学生との仕事を終えた後は一旦フィンドレー大学にバンで戻りヘンダーソンという学食で昼食を取っていました。ヘンダーソンはビュフェスタイルでなんでも食べ放題で、私たちの体重増加の最も大きな原因となりました。サラダ、ハンバーガー、フレンチフライ、ハンバーグ、ワッフル、ケーキ、クッキー、ジュース、フルーツ、サンドイッチ、スープ、中国料理、メキシカン、パン、グラノーラ、今思い出すだけでもお腹が空いてきます。ましてや朝早くから起きて馬を扱いお腹が空いた後にこの樂園、食べ過ぎないわけがありません。毎日晚御飯も他の予定がなければヘンダーソン。最高でした。私は毎日サラダ山盛り、ハンバーガー、ワッフル、パン、フレンチフライ、スープを大量に食べていました。幸せとはこのことなのだと毎日思っていました。アメリカに来る前には日本食恋しくなるよと散々言われましたが、そんな片鱗もなく毎日アメリカのご飯にのめり込んでいってしまいました。どのご飯も基本的にその場で作ってくれるものが多く、熱々のものを食べていました。今感じるのは、アメリカ食ロスです。それしかない。日本では味わえないあの美味、決して雑なわけではない。あの魅力はなんなのだろうか。そんな事を考えながら毎日過ごしていました。昼食が終わる時にはボトルにジュースを一杯まで入れてバナナ2本くらいもらって行きました。昼食後は家に帰る事もなくそのままバンでまたウェスタンバーンまで戻り今度はプライベートの生徒たちに混じってDr.カーンズの授業を2コマ受けていました。1コマ目は馬の治療を学びこれがとてつもなくカルチャーショックでした。1時間の授業の中で20分ほど座学を行い、すぐさま隣のバーンに移動し先ほど習ったことを実践するのです。効率良く、学生にとって最もよい学習スタイルだと感じました。また、クラスは少人数制であり学生は15人程度でした。この人数に対し教員1人ティーチングアシスト3人がつきます。授

業に出ないなどという考えはそもそも現地の学生にはなく、寝たり、自主学習をするなどありませんでした。きちんと1人1人に目が行き届く人数の指導者を用意しそれに皆がついていく。最高の授業スタイルだと感じました。また少人数制にこだわるため同じ授業が週3回用意されていました。初日にこれを見た時は、日本の獣医が世界のレベルに届かない、追いつけない理由が少しわかった様な気がしました。この1つの授業に対して言っているわけではなく、どの工程もしっかりと考えられて組み立てられておりさすがとしか言いようがなかったです。同時に日本は変わらなければならないとも感じました。いつまでも日本だけが英語による獣医学から目を背けてはいけなし、様々な体制を本当に獣医学生、獣医師にとって利益のある形を取らなければならないと感じました。2コマ目は車で3分程のところにあるアニマルサイエンスセンターに行き豚、ヤギ、羊、ホルスタイン、肉牛について実習スタイルでの授業を行いました。ここでは去勢、断尾、蹄のクリーニング、削蹄、ID、注射、薬の経口投与と様々なことをティーチングアシストの学生とともに行いました。ここでも、日本との差を思い知らされました。日本では我々学生は授業、実習であっても医療行為に準ずる行為を禁止されており、実際の現場でもほとんどさせてもらえることはできず、見ているだけということがほとんどです。これではどんなに勉強を頑張ってもアメリカに追いつく事はできません。百聞は一見にしかずなのです。かれらは学生の時から実際に手うごかし、練習し獣医師への道を目指します。本当に羨ましく、嫉妬すら覚えました。こんな刺激的なこと五感で感じながら毎日を過ごしていました。この授業が終わる頃にはもう3時でした。そこからまた学校に戻り晩御飯をヘンダーソンで食べるというのがベーシックな1日でした。しかし基本的に毎日その後や、アニマルサイエンスから連続してイベントが入っており何もなく終わる日はなかったです。晩御飯もキャンパスの外で食べることも多くたのしい毎日でした。そのほかのイベントとしては、心や身体に問題を抱える人が受けるホースセラピーのアシスタントをおこし、ドッグトレーニングスクールでの見学、Dr.ウィットカーの繁殖のラボに伺い実験をしたりしました。どれもが楽しく、新しい体験に満ち溢れていました。全ての過程で多くの学生、職員、先生と触れ合い、皆と友達になりました。堅苦しい菅家などではなく一緒にアイスホッケーを見に行ったり、ご飯を食べに行ったり、ショッピングに行ったり、最高の日々でした。また週末には学生の実家にホームステイをしたり、動物園に行ったり、オハイオ州立大学に行ったり

しました。ホームステイでは私はジョニーという学生の実家に行きました。彼女は去年この交換プログラムで酪農学園大学に来ておりすでに友達の中であったので、彼女の家族に会うのは本当に楽しみで、実際行ってみてあの時間はとても特別で大切な時間となりました。彼女の家は本当に大きく東京ドーム8個分ありました。あひるがいて、鶏がいて、プードルがいて、ロニー、ジョニー、ジョン、クリスティンがいる、のどかで幸せに満ちた空間でした。動物園ではマナティーのバックヤードツアーに参加することが出来、非常に貴重な体験が出来ました。最終週にはアメリカ最大のミルクパーラーを持つ農場に行き4500頭の牛を管理し飼育、肥育しているメガファームを見学しました。またベケット先生という以前のフィンドレーの学長であった先生の息子さんがやっている動物病院とアニマルアンリミテッドという保護施設と一体化している病院を見学させていただきました。動物病院では動物の置かれている環境、病院の衛生レベルに驚きました。ベケット先生の病院において、犬のケージではほとんどの犬が屋根のないケージでありかつ、2部屋のケージに個別に入っていました。全ての床は少し柔らかく、部屋は2部屋の中央に向かって若干傾斜していました。この傾斜により尿は排泄路に向かって流れ、清掃時も水をホースで流しながら掃除できるようになっていました。これは清掃する側にとっては効率的に清掃でき、動物にとっては衛生的であるというWIN-WINの関係であると感じました。また病院内は非常に綺麗な状態にキープされていました。臭いも日本の病院とは違いほとんど犬の臭い、糞尿の臭いはしませんでした。これは本当に驚くべきものでした。アニマルアンリミテッドでは野生動物の保護、治療が地下でボランティアによりよって行われ、地上の病院では一般の病院で診療が行われている。これですら驚くべきことですが、この病院の獣医師の多くはボランティアとして野生動物の診療、治療しつつ、地上では仕事として診療を行っておるのです。日本には存在しないスタイルです。本当に見るものの全てが新鮮でした。

ここには書きつくせない程の思い出がありますが、この辺にしておこうと思います。この交換留学を支援し支えてくださった、酪農学園大学のエクステンションセンターの中屋さん、篠原さん、フィンドレー大学でプログラムを組んでくださり、お世話をしてくれた川村先生、クリス、アーネスト、出会った全ての皆さんに有難うございましたと伝えなければなりません。そして、このプログラムが絶えることなく1人でも多くの学生が新しい世界を感じ、成長する

ことを祈っています。私は可能であればフィンドレー大学への1年間のプログラムに参加できることを祈っています。

